

語学の天才ウギスさんによるチャペルトーク

～ 関西学院大学経済学部 ～

池田裕子



キリスト教主義教育を建学の精神とする関西学院大学では、1時間目と2時間目の授業の間に30分間のチャペルアワー（礼拝の時間）が設けられています。チャペルは、通常、各学部校舎にあるチャペル専用の部屋で学部ごとに行われます。礼拝と言っても、30分間祈り続けるわけではありません。様々な趣向が凝らされていて、音楽を聴いたり、歌ったり、様々な分野のゲストの話の聞いたり、授業とは異なる知的、情操的出会いの場になっています。今年3月にラトビア大学で開催された第14回日本語弁論大会で優勝されたウギス・ナステビッチさんから関西学院を訪問したいとのメールをいただいた時、経済学部でのチャペルトークをお願いしました。ウギスさんは、「キリスト教とラトビア神道の共存」という大変興味深いテーマを考えてくださいました。

6月15日（月）午前11時5分（JR宝塚線の事故のため、午前中の授業が30分遅れとなりました）、厳かなオルガンの音色と共にチャペルが始まり、宗教主事の舟木譲先生が講壇に立たれました。出席者は約50名。経済学部の学生だけでなく、他学部生、関西日本ラトビア協会の面々、さらには田中敦経済学部長、ヴァイヴァルス初代駐日大使が初めて関西学院を訪問された時に大学主催特別講演会を開催して歓迎してくださった杉原左右一前々学長のお顔もありました。

讚美歌斉唱、聖書朗読（ヨハネ8:31-32）を経て、ウギスさんのトークが始まります。最初に、黄砂で喉を傷め、すっかりハスキーボイスになってしまった私がウギスさんを紹介しました。100年近く前に関西学院で教えていたラトビア人青年イアン・オゾリンは16カ国語を話す語学の天才だったと伝えられています。その意味で、ラトビアにしながら独学で日本語をマスターされたウギスさんはオゾリンの再来のように思えるとお話しして、ウギスさんにマイクを渡しました。

ウギスさんは、スライドを見せながら、流暢な日本語で堂々と話をされました。「ラトビア神道」という耳慣れない言葉に最初から聴衆は興味津々の様子でした。古来より、ラトビアでは自然崇拜の多神教信仰であるラトビア神道が大切にされてきたそうです。2万篇を超える神秘民謡がその聖典と考えられるそうです。日本ではあまり知られていないラトビアの歴史とキリスト教の布教が土着の神道とからめて説明され、最後には現在のキリスト教会でラトビア神道が何の違和感もなく自然に受け入れられている様子が映像で紹介されました。



チャペルの時間が終わっても、熱心な学生が残り、ウギスさんを質問攻めにしていました。「次に来られる時は、キリスト教と文化研究センターでぜひお話しいただきたい」と舟木先生からもお言葉を頂戴しました。



写真家として、オゾリン記念樹（ラトビアから贈られたオークとシラカバ）の撮影に夢中のウギスさん